

南相馬市埋蔵文化財調査報告書 第19集

表 横 穴 墓 群

急傾斜対策工事に伴う発掘調査

平成 22 年 3 月

福島県相双建設事務所
福島県南相馬市教育委員会

序

文化財は、我が国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかつた先人の生活の様子や文字がまだなかつた時代の人々の生活や文化について、私達に多くの情報を与えてくれます。

近年、南相馬市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつあります。その一方で、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では、埋蔵文化財の保護のため、開発が行われる前に、遺跡の範囲や性格などの情報を得る目的で、分布調査や試掘調査を実施しております。

開発に関しては、これらの資料をもとに、関係の方々及び機関と遺跡についての保存協議を行い、保存が困難な場合については、記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成 21 年度に、急傾斜対策工事に伴い失われてしまう表横穴墓群について実施した発掘調査の成果報告書です。今後、この報告書を埋蔵文化財の保護、地域史研究のために活用していただければ、幸いに存じます。

終わりに、相双建設事務所をはじめ、調査にご理解・ご協力いただきました方々に、心から感謝申し上げます。

平成 22 年 3 月

南相馬市教育委員会
教育長 青 木 紀 男

例 言

1. 本書は、急傾斜対策工事に伴う表横穴墓群の埋蔵文化財調査報告である。
2. 発掘調査は、南相馬市教育委員会が福島県相双建設事務所の委託を受けて実施したものである。
3. 発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体 南相馬市教育委員会文化財課

事務局	教育長	青木紀男
	事務局長	大谷和夫
	事務局次長	門馬清一
	文化財課長	烏中清
	主査	二本松文雄
	事務補助	佐藤夏姫

調査担当	文化財課長補佐	堀耕平
	主任文化財主事	川田強
	主任文化財主事	荒淑人
	文化財主事	藤木海
	文化財主事	佐川久

4. 現地調査は川田強・荒淑人が行った。
5. 発掘調査の写真は荒淑人・川田強が撮影した。
6. 整理調査・報告書作成作業ならびに本書の執筆・構成・編集は川田強が行った。
7. 発掘調査によって得られたすべての記録類は、南相馬市教育委員会（〒975-0012 福島県南相馬市原町区三島町二丁目45番 TEL0244-24-5284）が保管している。
8. 発掘調査期間中及び報告書作成にあたってご協力をいただいた方々のご芳名を記して深く感謝の意を表したい。（敬称略）

相双建設事務所 阿部貞伊 渡部良一 木幡進一 佐藤八千代
西千恵子 西保

凡 例

1. 遺構図に示した方位は、座標北を示す。
2. 掲載した図面の縮尺は図中に示した。
3. 遺構図のうち、平面図のアルファベットは断面図の位置を示し、断面に示した数値は東京湾の平均海面を基準とする海拔標高を示す。
4. 引用・参考文献については、執筆者の敬称を省略して第4章の文末に記載した。

目 次

序	i
例 言	iii
凡 例	iii
目 次	iv
挿 図 目 次	iv
図 版 目 次	iv
第1章 遺跡を取り巻く環境		
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査概要		
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査要項	3
第3節 調査経過	4
第4節 調査の方法	4
第3章 調査内容		
第1節 遺跡の概要	5
第2節 調査内容	7
第4章 ま と め		
..... 9		
引用・参考文献		
写真図版		
報告書抄録		
奥 付		

挿 図 目 次

図1 南相馬市位置図 1	図4 表横穴墓群全体図 6
図2 周辺の遺跡 2	図5 1号横穴墓実測図 8
図3 表横穴墓群位置図 5		

図 版 目 次

図版1 11	図版2 12
1 1号墓全景		1 1号墓（玄門から奥壁）	
2 1号墓玄門（1）		2 1号墓排水溝	
3 1号墓玄門（2）		3 1号墓（西壁・奥壁）	
4 2～4号墓全景		4 1号墓（奥壁から玄門）	
5 表横穴墓群から東方を望む			

第1章 遺跡を取り巻く環境

第1節 地理的環境

福島県南相馬市は福島県太平洋岸の中央部やや北寄りに位置する。平成18年1月に小高町・鹿島町・原町市の1市2町が合併して誕生した南相馬市は、旧市町を小高区・鹿島区・原町区として区分している。本書で報告する「表横穴墓群」はこのうち小高区に所在する。

市内の地形は西部域に南北方向に連なる阿武隈山地が縦走し、そこから太平洋に向かって派生する丘陵ならび海成・

河成の段丘、沖積平野で構成される。阿武隈山地にかかる西側の丘陵・段丘の標高は100～150m、海岸部に近い市内中心付近では標高50～60m、海岸部では20～30mとなる。

丘陵地の地質は主に第三紀の凝灰岩を基盤とし、段丘は樹枝状に広がる丘陵地の縁辺に形成されている。段丘は大きく高位・中位・低位に区分されている。

「表横穴墓群」は宮田川という小規模な河川を挟む支谷の北側丘陵地斜面に所在する。宮田川は全長5kmほどの河川であり、水源は阿武隈山地より東側の丘陵地にとどまる。この宮田川が形成する支谷には、かつては井田川浦、蛭沢浦、耳谷浦などと称される潟湖が形成されていた。この潟湖は東西1.8km、南北1kmを測り、大正時代に干拓されている。「表横穴墓群」はこの潟湖の明治期の汀線からは700～800m西側の丘陵地斜面に位置する。



図1 南相馬市位置図

第2節 歴史的環境

本書で報告する「表横穴墓群」が位置する宮田川流域は、近年浦尻貝塚の保存目的の調査が実施されている他、これまでに宮田貝塚の学術調査など主に縄文時代を中心とした調査成果がある。表横穴墓群に隣接する加賀後貝塚(5)でも宮田貝塚とほぼ同時期の縄文時代前期前半の貝塚・遺物包含層、落とし穴と推定される土坑が検出されている。これらは浦尻貝塚を中心とした貝塚を伴う縄文遺跡群として特筆される遺跡群であり、今後の調査成果が期待される。

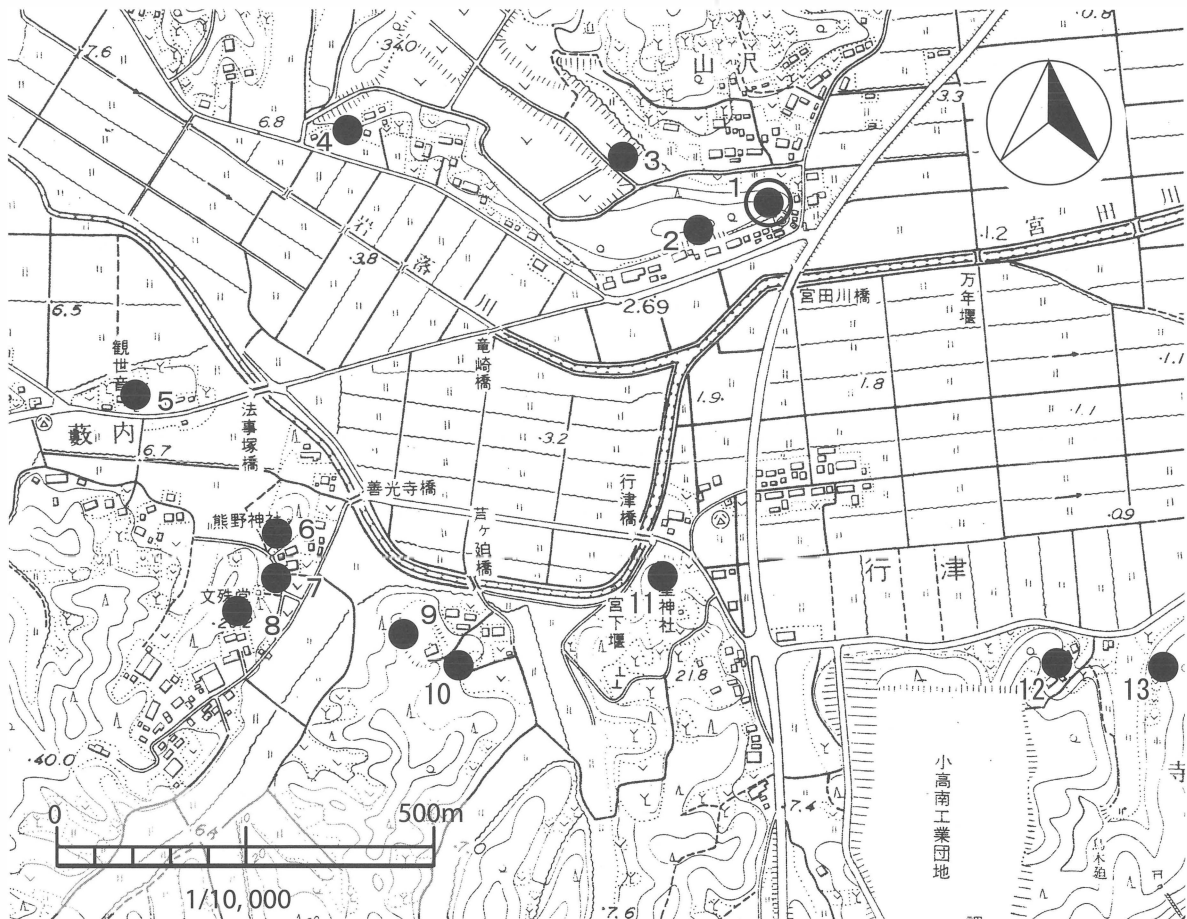
弥生時代では、加賀後貝塚で、中期後葉の遺物包含層が確認されている。この遺物包含層は、沖積地に位置する地点で確認しており、近隣に水田等の遺構が確認される可能性がある。加賀後貝塚では、古墳時代前期・後期の土坑の他、古墳時代後期の遺物包含層も調査されている。加賀後貝塚は、水田面に島状に突出した低位段丘上にあり、弥生時代以降生活の場として多く利用されていたことが明らかとなっている。

古墳時代としては小泉横穴墓群(4)、中村迫横穴墓群(6)、芦ヶ迫横穴墓群(10)といった多くの横穴墓群が所在することが特徴的である。これらは未調査であり、既に倉庫等に利用さ

れ、損壊しているものも多いが、小支谷ごとに形成が認められ、宮田川中流域に一定の集中をみせる横穴墓群として位置付けられる。この他、山沢古墳群(3)、小泉古墳(4)、文殊堂古墳(8)などが古墳として遺跡登録されているが、現状では確認できず、その実態は不明である。

奈良・平安時代では、加賀後貝塚で遺物が出土している他には、周辺での発掘調査は少ない。宮田川南岸は「和名類聚抄」に見える「標葉郡宇良郷」の比定地であり、宮田川がある支谷が古代行方郡と標葉郡の郡境であったと推定されている。

中世には、この郡境を挟んで城館が築かれている。北側の行方郡側に相馬氏方の城館として山沢館があり、現在も堀切を残している。南側には、標葉氏方の居館として鹿島館跡(11)、下浦館跡(13)がある。また文献に登場する上浦館跡(9)は、現況では館の状況を確認できない。現在、文殊堂ならびに熊野神社が所在する中村迫遺跡(7)が「上浦館」である可能性が指摘される。



No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別
1	表横穴墓群	古墳	横穴墓	7	中村迫遺跡	中世	城館跡?
2	山沢館跡	中世	城館跡	8	文殊堂古墳	古墳	古墳
3	山沢古墳群	古墳	古墳	9	上浦館跡	中世	城館跡
4	小泉横穴墓群 小泉古墳	古墳	古墳・横穴墓	10	芦ヶ迫横穴墓群	古墳	横穴墓
5	加賀後貝塚	縄文・弥生・古墳・ 奈良・平安	横穴墓	11	鹿島館遺跡 鹿島館跡	縄文・古墳・奈良・ 平安	散布地 城館跡
6	中村迫横穴墓群	古墳	横穴墓	12	鳥木迫遺跡	近世	散布地
				13	下浦館跡	中世	城館跡

図2 周辺の遺跡

第2章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

平成20年8月、南相馬市小高区耳谷字表地内の急傾斜対策工事における埋蔵文化財の取り扱いについての事前協議が相双建設事務所と南相馬市教育委員会で実施された。協議の結果、現地調査をもってその取り扱いについて回答することとした。

同年9月、南相馬市教育委員会が現地調査を行い、開発区域内に横穴墓5基が確認されたほか、複数の横穴が倉庫として利用されており、横穴墓を転用したのも含まれると考えられることから、横穴内の資材撤去の上、再度調査をする必要がある旨を相双建設事務所に伝えた。これを踏まえ、同月、相双建設事務所と南相馬市教育委員会が地権者に対し、開発工事に伴う埋蔵文化財調査の説明会を開催し、調査への協力を求めた。

平成21年2月、地権者の承諾を得られたことから、試掘調査時期の協議を行い、同年3月、相双建設事務所から事前調査の実施依頼が南相馬市教育委員会に提出された。同年4月、南相馬市教育委員会が調査を行い、開発区域内の7基の横穴墓が確認され、工法対応ができない場合、本調査が必要と回答した。この調査の結果を受け、再度協議を行い、要保存対象の横穴墓のうち、開発により損壊が免れない1号横穴墓について本調査を実施することとした。

同年5月、相双建設事務所から、文化財保護法第94条に基づく発掘届ならびに南相馬市教育委員会へ発掘調査依頼が提出され、同月、南相馬市教育委員会が発掘調査を実施した。調査終了後の同年11月、整理調査ならびに調査報告書作成は、相双建設事務所が費用負担するとの協定を南相馬市と相双建設事務所が締結をし、これらの作業を南相馬市教育委員会が行った。

第2節 調査要項

遺跡名称	表横穴群（おもてよこあなぐん）		
所在地	福島県南相馬市小高区耳谷字表地内		
遺跡現況	山地		
遺跡性格	古墳時代横穴墓		
調査原因	急傾斜対策工事		
調査期間	平成21年5月15日～18日		
調査対象面積	10㎡		
調査主体者	福島県南相馬市教育委員会	教育長	青木紀男
担当調査員	川田 強・荒 淑人		

第3節 調査経過

平成21年(2009年)

- 5月15日(金) 横穴墓の玄室内の精査、清掃。
- 5月18日(月) 写真撮影、図面作成。

第4節 調査の方法

調査対象となった1号横穴墓は調査着手前までもみ殻貯蔵庫として利用されて開口しており、工事計画では横穴内を埋め、コンクリート等で被覆する工事計画であることから現状の記録保存を図るものとした。

調査は、横穴墓玄室内の内部清掃を行った後、排水溝の検出ならびに底面・壁面に残る加工痕の精査を行った。

図面作成作業は、トータルステーション(SOKKIA製 SET600S)を用いて基準点を設定し、実施した。図面作成作業において器械点及び視準点として、国土座標値(日本測地系)を用いた。遺構等の平面・断面図は、簡易遣り方測量により実施した。

遺構及び遺物の写真撮影は、遺構の状況や遺物の出土状態を記録するため、35mm カラーリバーサルフィルムおよび35mm モノクロフィルム、35mm カラーフィルムを用い、デジタルカメラを補助的に使用して適宜写真撮影を実施した。

第3章 調査内容

第1節 遺跡の概要

表横穴墓群は、宮田川ならびに沖積地を南側に望み標高30mを囲む丘陵地の南側斜面に位置する。表横穴墓群が所在する丘陵の北側に支谷があり、丘陵は幅30mほどの平坦面しかなく、東西に伸びる尾根状の形状を呈する。中世にはこの丘陵を中心に山沢館が築かれている。

表横穴墓群の範囲は、この丘陵斜面を中心とした東西350mを登録している。今回の調査によって横穴墓が確認された範囲としても約250mを測る。この範囲内には多数の「横穴」が存在するが、現在も倉庫として利用されているものが多く、横穴墓を改造したものも含まれていると考えられる。本調査に先立つ現地調査では7基の横穴墓が確認された。このうち1・2号横穴墓は玄関から玄室がほぼ残るものであるが、3～7号横穴墓は過去の治山工事ならびに近隣住民の倉庫でほぼ損壊しており、ドーム形あるいはアーチ形の天井部や半円形の奥壁の一部などが確認されるにとどまるものであり、かろうじて横穴墓であったと指摘できるに過ぎない。

これら確認される横穴墓は標高5～10mに位置し、丘陵地の基盤となる第三紀の大年寺層に相当する凝灰質泥岩を掘り込んで作られている。

今回の工事対象区域は過去に治山工事が実施されており、今回の工事は現在のコンクリート被覆部の上から再度施工を施す計画であった。このため、現在のコンクリート被覆部下にも横



図3 表横穴墓群位置図



図4 表横穴墓群全体図

穴墓が存在する可能性があるが、今回の工事で現コンクリートを除去しないことから、改めてコンクリート被覆部下の横穴墓の所在確認を実施することは断念した。しかし、現在確認される横穴墓は広範囲にわたっており、これらの分布状況からみて、本来は多くの横穴墓が所在していたと推定することができよう。

第2節 調査内容

1号横穴墓

〔立地〕

尾根状に東西に延びる丘陵東端にあたり、丘陵斜面の凝灰質泥岩を掘りぬいている。南側の沖積地につながる宅地より1.0～1.5mほど高い位置に玄門があり、玄門底面の標高は5.7mを測る。

〔保存状況〕

玄門はすでに開口し、羨道部も欠落し、玄門・玄室を残すのみである。閉塞石も確認できなかった。現存する玄門～奥壁までの全長は333cmを測る。これまでもみ殻貯蔵庫として利用されており、玄室内部の堆積土は失われていた。天井部の上位30cmは剥落している状況が観察される。玄門底面は過去の治山工事により、コンクリートにより被覆されている。遺物は出土しなかった。

〔玄室〕

規模：奥行280cm。奥壁幅222cm。前壁幅231cm。奥壁高171cm。前壁高183cm。

平面形：方形。玄門部との境界は明瞭である。

立面形：ドーム形。天井部が剥落しているが奥壁・前壁から緩やかな曲線を持って頂部に至る形状を示す。

横断面形：半円形。天井部は剥落がある。

排水溝：奥壁に向かって左側から玄門に向かって、長さ137cm、幅13cm、深さ3～5cmの溝が作られている。溝の断面形はU字形である。玄門部はコンクリートにより覆われているが、排水溝が伸びていたと推測できる。

工具痕：工具幅はいずれの面でも約5cmを測り、ほぼ同様の工具で作られたと考えられる。比較的粗い工具痕が観察される。側壁・前壁はいずれの面でも壁に向かって左上方から右下方に向かって工具痕が確認される。奥壁は上位から下位に向かって縦方向に削られているが、大きく3段の施工に分けられ、上段・下段がほぼ垂直に、中段はやや外側に向く方向の工具痕が認められる。

〔玄門〕

規模：奥行58cm。玄室側幅73cm。羨道側幅72cm。玄室側高92cm。羨道側高81cm。

平面形：方形。

立面形：アーチ形。

工具痕：工具幅は、玄室同様である。壁に向かって左から右へ、玄室に比べやや横方向に工具痕が認められる。

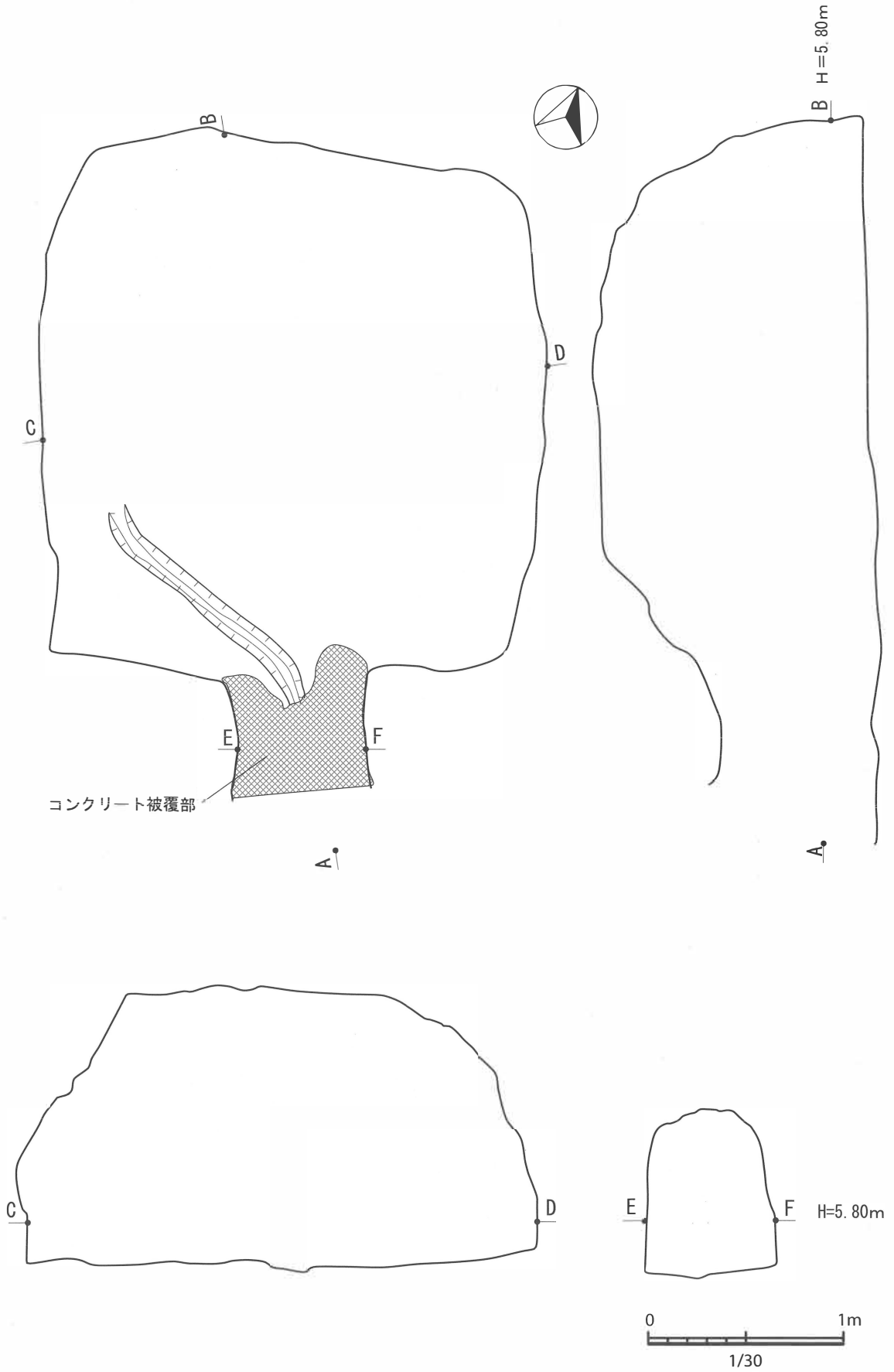


図5 1号横穴墓実測図

第4章 ま と め

南相馬市では、原町区内の太田川流域の国指定史跡「羽山横穴」や高林横穴墓群、新田川流域の北山横穴墓群、鹿島区では真野川流域の中谷地横穴墓群や大窪横穴墓群などで、横穴墓の発掘調査がされている。この中には、複室の構造を持つ中谷地1号横穴墓や装飾横穴である「羽山横穴」などの首長級の横穴墓も確認されている。

表横穴墓群の所在する小高区では、表横穴墓群の北側にあたる小高川流域において、小高町史に掲載されている日向横穴墓群、波岩横穴墓群の他、近年、大井の水谷迫横穴墓群で治山工事に伴う発掘調査が行われている。この中でも、特に波岩横穴墓群A群11号は珠文等を残す装飾横穴として知られている。

このように当地域では、阿武隈山地から東流する各河川流域に横穴墓群があり、装飾横穴など特筆される横穴墓も含まれることから、当地域の古墳時代後期の様相を検討する上で、これら横穴墓群は極めて重要な資料と言えるだろう。

表横穴墓群は南相馬市の南端にあたる宮田川中流域に位置する。周辺の支谷にも複数の横穴墓群があり、宮田川流域ではこの中流域に横穴墓群の集中が認められる。このような分布状況を示す中で、表横穴墓群の横穴墓は確実に確認できるものは7基に留まるが、約250mの丘陵斜面にわたっており、広い範囲で形成されていることが特徴的である。また、この範囲には倉庫として利用された30基以上の「横穴」があり、これらも横穴墓を改造した可能性が考えられ、本来は多数の横穴墓が存在していたと推測される。このように表横穴墓群は、広い範囲で多数の横穴墓で構成されていた可能性が高いことから、宮田川流域の中でも中心的な横穴墓群と考えられる。

今回、調査された1号横穴墓からは残念ながら遺物は出土せず、時期等不明な点も多く残されるが、規模は当地域の横穴墓としては平均的であり、他に確認された横穴墓も残存状況からほぼ同様の規模と考えられる。

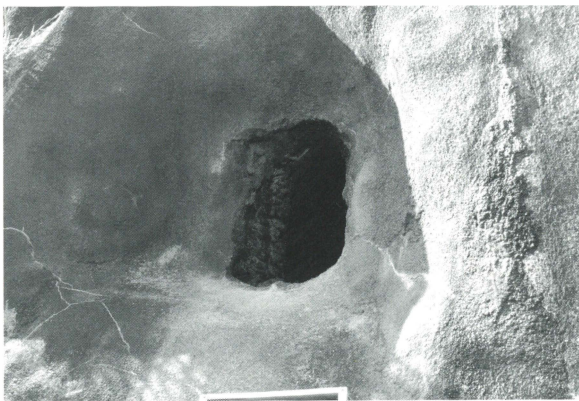
当地域の横穴墓群は倉庫利用や過去の治山工事などで損壊、改造されているものも多いが、残された横穴墓の一つ一つの調査成果を重ねていくことにより、横穴墓の比較検討が可能となり、当地域の古墳時代の様相にせまることができると考えられる。このことから、これまで宮田川流域では横穴墓群が所在することは確認していたものの、測量調査さえ行われていなかったことを考えると、今回の調査成果も地域史解明にむけた有効な資料となるだろう。

引用参考文献

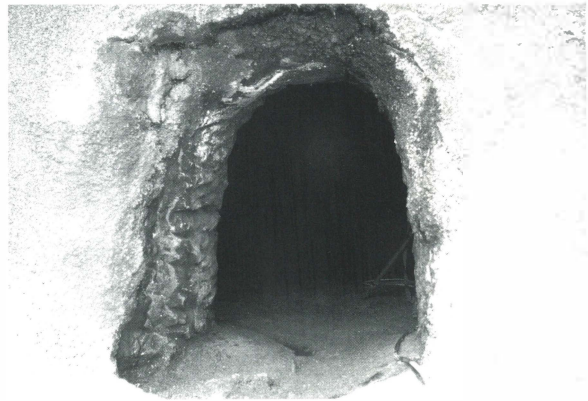
- 荒叔人ほか 2007 「浦尻古墳群」『南相馬市内遺跡発掘調査報告書3』
南相馬市埋蔵文化財調査報告第8集 南相馬市教育委員会
- 小高町 1975 『小高町史』
- 鹿島町 1999 『鹿島町史第3巻 資料編2 「原始・古代・中世」』
- 川田強 2001 「加賀後貝塚」『小高町内埋蔵文化財調査報告1』
小高町文化財調査報告第2集 小高町教育委員会
- 佐川久ほか 2006 「加賀後貝塚」『南相馬市内遺跡発掘調査報告書2』
南相馬市埋蔵文化財調査報告第3集 南相馬市教育委員会
- 佐川久ほか 2008 「水谷迫横穴墓群」『南相馬市内遺跡発掘調査報告書4』
南相馬市埋蔵文化財調査報告第10集 南相馬市教育委員会
- 佐藤敏幸ほか 2008 『矢本横穴墓群I』東松島市文化財調査報告書第5集 東松島市教育委員会
- 竹島国基ほか 1975 『宮田貝塚』小高町教育委員会
- 二本松文雄 2003 『北山横穴墓群発掘調査報告書』原町市埋蔵文化財調査報告第30集 原町市教育委員会
- 原町市 2005 『原町市史 第3巻 特別編I 「自然」』
- 渡辺一雄ほか 1974 『羽山装飾横穴発掘調査概報』原町市教育委員会



1 1号墓全景



2 1号墓玄門(1)



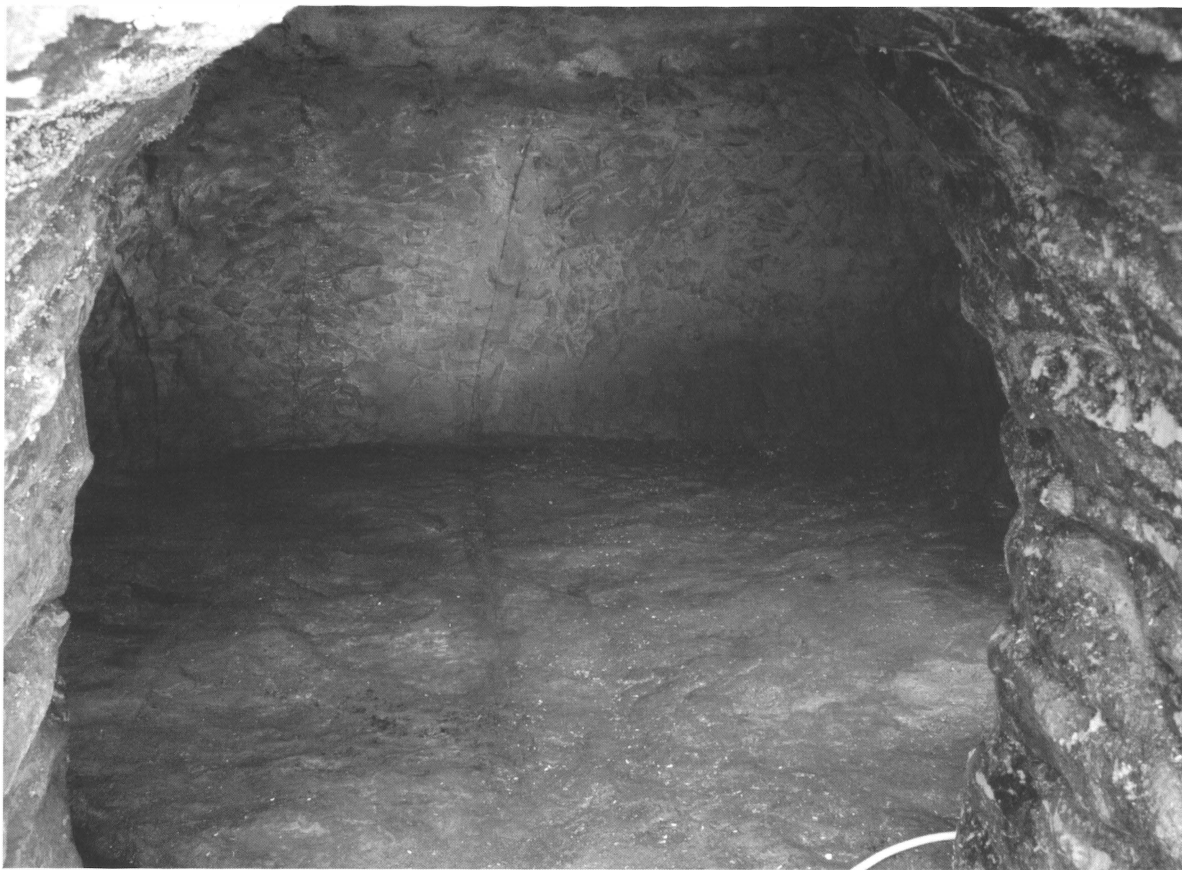
3 1号墓玄門(2)



4 2~4号墓全景



5 表横穴墓群から東方を望む



1 1号墓 (玄門から奥壁)



2 1号墓排水溝



3 1号墓 (西壁・奥壁)



4 1号墓 (奥壁から玄門)

報 告 書 抄 録

ふりがな	おもてよこあなぼぐん					
書名	表横穴墓群					
副書名	急傾斜対策工事に伴う発掘調査					
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第19集					
編著者名	川田 強					
編集機関	福島県南相馬市教育委員会文化財課					
所在地	〒975-0012 福島県南相馬市原町区三島町二丁目45番地					
発行年月日	西暦2010(平成22年)3月31日					
所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
			東経			
野馬土手 原町西町遺跡	南相馬市小高区 耳谷字表	2125 00485	37° 31' 27"	20080515 ~ 20080518	10	急傾斜 対策工事
			140° 59' 53"			
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
表横穴墓群	横穴墓	古墳	横穴墓	—	古墳時代の横穴墓	

南相馬市埋蔵文化財調査報告書 第 19 集

表 横 穴 墓 群

急傾斜対策工事に伴う発掘調査

印 刷 2010 年 3 月 29 日

発 行 2010 年 3 月 31 日

編 集 南相馬市教育委員会 文化財課

発 行 南相馬市教育委員会

〒 975 - 0012

福島県南相馬市原町区三島町二丁目 45 番地

印刷所 株式会社 まつざき印刷

〒 979 - 1525

福島県双葉郡浪江町大字高瀬字根木内 100